

『六祖壇經』の一考察

近藤章正

一 はじめに

今回の一考察は、敦煌本『六祖壇經』（以下敦煌本『壇經』）と『南陽和上頓教解脫禪門直了性壇語』（以下『壇語』）の比較、及び『神會語録』等の再考察より生じた「中道」と「両辺」の問題に注目したい。またこれに併せて、従来より指摘される敦煌本『壇經』内の神會（六八四～七五八）批判にも注目したい。神會批判については、既に小川隆氏により「敦煌本『六祖壇經』の成立について（之一）」（駒沢大学大学院仏教学研究会年報」第二号・一九八九年）の中で、敦煌本『壇經』

ヤンポルスキー本 (Philip B. Yampolsky, "THE PLATFORM SUTRA OF THE SIXTH PATRIARCH" New York and London COLUMBIA UNIVERSITY Press, 1967) による。】敦煌本『壇經』(一七)の「若無有念、無念亦不立」、すなわち無念の否定により神會批判を認めることを好都合とし、「神會批判はその一部分にのみならず、壇經全体を通じて、一貫している」と主張される。

二 「中道」と「両辺」について

「中道」の語については、『壇語』、『神會語録』には見られない。ただし『神會語録』等には『菩提達摩南宗定是非論』にも見られる「中道第一義諦」の語がある。しかし「中道」を「両辺」と表現する箇所は、三ヶ所見受けられる。一般的に「両辺」はどの注釈書も「両極端」の意味に解している。例えば敦煌本『壇經』(四二)では、慧能(六三八～七二三)の十大弟子の一人で、『法華經』に通じた言われる法達に示した一節に

「中道」の語については、『壇語』、『神會語録』には見られない。ただし『神會語録』等には『菩提達摩南宗定是非論』にも見られる「中道第一義諦」の語がある。しかし「中道」を「両辺」と表現する箇所は、三ヶ所見受けられる。一般的に「両辺」はどの注釈書も「両極端」の意味に解している。例えば敦煌本『壇經』(四二)では、慧能(六三八～七二三)の十大弟子の一人で、『法華經』に通じた言われる法達に示した一節に

「…汝聽吾説。人心不思、本源空寂、離却邪見、即一大事因緣。内外不迷、即離兩邊。外迷看相、内迷著空。於相離相、於空離空、即是不空迷。吾此法一念心開、出現於世。心開何物、開佛知見。佛猶如覺也。分為四門。開覺知見、示覺知見、悟覺知見、入覺知見。此名開示悟入。…」とある。すなわちここでは「開示悟入」という『法華經』を抛り所とした『大乘無生方便門』に示される北宗禪の立場に集約されていく。「両辺」の解釈は『法華經』にその抛り所を求めているのである。またこの他に『壇語』(三三二)にも「涅槃云。此是第一義空。若三処俱空寂。唯有中道。亦不在其中。中道義因邊立。猶如三指並同。要因兩邊始立中指。若無兩邊。中指亦無。經云。虛空無中邊。諸佛身亦然。諸解脱法身。亦如虛空無中邊。」として「両辺」の語が見られる。しかし『神會語録』においては、石井本〔五〕胡適本〔一〇〕に簡法師と神會の間に交わされた「中道」と「辺」の門答があるものの「両辺」の語は見られない。

そこですでに敦煌本『壇經』において、「両邊」の語は、(四二)以外に、(四五)の「…學三科法門、動用三十六對、出沒即離兩邊。…」、(四六)の「…此三十六對法、解用通一切經、出入即離兩邊。…」に見られる。因みにここでは「即離兩邊」、「出沒即離兩邊」、「出入即離兩邊」という表現方法が採られている。これらは特に難解とされつつも従来より二通りの解釈がある。まず柳田聖山氏は、『禪語録』(中央公論社・世界の名著第一八卷『禪語録』所収『六祖壇經』二九七八年)の中で、(四二)の「法華經」に基づく「即離兩邊」については、「(心は内にも外にも見失うことなく)両端を離れている。」(一一五頁)と解釈するが、(四五)(四六)では、敦煌本『壇經』で初めて説かれる難解な三科法門と三十六對法と共に「出沒即離の兩邊」(二六三頁)、「出入即離の兩邊」(二六四頁)の説示があつたと解釈される。これに対して中川孝氏は、『六祖壇經』(筑摩書房・『禪の語録』四・一九七六年)の中で、すべて「(心中においても、外の対象に対しても、迷いを起こさなければ)二つの対立は起こらない。」(一五七頁)と一貫した解釈を心がけている。また「(三十六對法の)出し入れによって相對の立場を脱却する」(一七三頁)と解釈される。ここでは「即離」の扱い方が解釈のポイントとなる。つまり「即」を「すなわち」と解釈するか、また柳田氏が解釈する様に、「従う」という意味(『禪語録』一六五頁)で捉え、「即」は「不二」、「離」は「不二に非ず」の意味合いとして二元的に捉えるかである。因みに『中論』觀四諦品(T三〇—三三三b)には「離有無二邊故名爲中道」とある。「二辺」を「両辺」とする根拠は、現段階では定かでない。またここでは「即離」と同様に「出沒」、「出入」に関する解釈に対する疑問が残る。これに対して『壇語』(三三二)では、『涅槃經』卷二五獅子

吼菩薩品(T二一七六七c)に基づき、神会は、「第一義空」を「空」の意味に捉え、「三処」とも「空」であるという思想を「中道」と「両辺」の關係に当てはめ、三指に例えるが如く、すべてを同一視する。しかし松本史朗氏は、『禪思想の批判的研究』(五六八頁)の中で、この『涅槃經』の一節について、「…『第一義空』の語は決して「空」ではなく「不空」を意味する。…」とし、特に三論宗の吉蔵(五四九く六二三)が正確にこの『涅槃經』の趣旨を理解していたとする。もしその当時、神会の空思想に基づく「中道」の思想に誤りがあることに気付いていたならば、当然それに伴う「両辺」の解釈に関しても批判があった筈である。つまり神会の「中道」思想は、『涅槃經』に基づく神会独特の思想として当時栄えたため、何者かが、その誤りを自らの立場で批判し、且つ指摘したものが、敦煌本『壇經』(四二)の『法華經』に基づく「即離両辺」と「開示悟人」という立場、更には、敦煌本『壇經』の三科法門と三十六対法と共に示される、「出沒(入)即離両辺」という新しい立場であったのかもしれない。その神会の「両辺」に批判を加えたと思われる一節が、敦煌本『壇經』(四四)の神会伝である。そこでは「…大師言、神會、向前見不見是兩邊、痛不痛是生滅。汝自性且不見、敢來弄人。…大師言、汝心迷不見。問善知識覺路、以心悟自見、依法修行。汝自名不見自心、却來問惠能見否。悟不自知、代汝迷不得、汝

若自見、代得吾迷。何不自修、問吾見否。…」とある。慧能の「見不見」こそが「両辺」であり、神会の「見不見」は、師に打たれて「痛い痛くない」という「生滅」して止まないことと同じである、とする。そして「知」と「見」に関する慧能の説示が続く。つまり神会の思想に対する慧能の説示が、「即離両辺」、「出沒(入)即離両辺」の立場であると仮定した場合、神会の「両辺」の解釈は、単なる「両辺」に過ぎず、併せて神会の「知」と「見」をも批判の対象としていたという推測が可能となる。またこのことを根拠とし、『壇語』において神会が用いた「両辺」の語は、後に否定されたため、『神会語録』には見えないという推測が成り立つ。

(註略)

(キーワード) 敦煌本『六祖壇經』、神会、中道、両辺

(駒沢大学大学院)